

楽器 チェレスタの魅力

2021年1月10日
NHKラジオ
クラシックの遺伝子

チェレスタは今から130年ほど前の1886年に特許を得た楽器、フランスはパリのオルガン製作者、オーギュスト・ミュステルが考案した楽器で鍵盤があり、大きさも形もオルガンようですが、音はまったく異なり、小さなかわいらしい音なのに遠くまでよく通ります。

チェレスタの内側には、鉄琴に似た金属製の音板が音階的に並んでいます。それをハンマーで叩いて音を出すという、鍵盤アクションを持つ打楽器です(ヤマハ楽器)

チャイコフスキーのバレエ音楽から世界へ

この愛らしい音に魅了された1人の作曲家が、チェレスタを世界中に広める立役者になります。それは、ピョートル・チャイコフスキー(1840~1893)です。

チャイコフスキーは1891年、アメリカへ演奏旅行に行く前にパリの街を歩いていて、この音を耳にしました。彼自身はすぐアメリカに行かなくてはいけなかったため、母国ロシアにいる楽譜出版者で親友のピョートル・ユルゲンソンに手紙を送り、チェレスタを1200フラン相当で買ってほしいと頼みました。手紙には「だれにもこのチェレスタを見せないでほしい、とくにリムスキー=コルサコフやグラズノフに見せてはならない。これは絶対に私が最初に使うから」と書かれていたそうです。

そして1892年、バレエ音楽『くるみ割り人形』の「こんぺい糖の踊り、終末のワルツと最後のアポテオース」の最後の場面でチェレスタを用いました。このバレエが興行的に大成功し、世界各国のバレエ団が演じたがったため、チェレスタも世界中のオーケストラやオペラハウスに買い求められるようになった。(ヤマハ楽器)

印象派や後期ロマン派の作曲家も好んだ

その後もチェレスタは、モーリス・ラヴェル(1875~1937)やドビュッシー(1862~1918)をはじめとする印象派の作曲家や、後期ロマン派のリヒャルト・シュトラウス、グスタフ・マーラーなどに好んで用いられたほか、現代音楽家にもよく使われ、楽器として定着していきました。

マーラー(1860年~1911年)は天国や星、水などの大自然を表現する際にチェレスタとフルートを良く使っている。

ちなみに、音の魔術師と呼ばれるラヴェルの『ボレロ』では、チェレスタはホルンとピッコロ2本と合わせて演奏されました。神秘的で、とても魅力的な演奏になっています。

20世紀、米国の巨匠・ジョン・ウィリアムズ (ハリリーポッターの作曲家)も好んだチェレスタの音色

彼は魔法の世界を描くとき、チェレスタの音色を使い、摩訶不思議な世界を表現しています。

19世紀のチャイコフスキーから20世紀の巨匠・ジョン・ウィリアムズにチェレスタの可憐な音色が引き継がれています。



チェレスタは小型のアップライトピアノのような形をしている。その内側には、鉄琴に似た金属製の音板が音階的に並んでいる。それをハンマーで叩いて音を出すという、鍵盤アクションを持つ打楽器。

チャイコフスキー:バレエ曲『くるみ割り人形』第2幕の最初の曲からチェレスタを使い音楽に彩りを添え、『こんぺい糖の踊り』では美しいソロを披露。新しい音楽を作りたいという熱意でチェレスタを使用した。

チェレスタ、名のいわれ

19世紀のパリで生まれたチェレスタ | オーケストラの楽器 チェレスタは、小型のアップライトピアノのような形をしている、鍵盤を持つ打楽器です。チェレスタとはイタリア語で「天国のような」という意味で、その名の通り、天国のような可憐な音を奏でます。

チェレスタの第一号(オーケストラモデル)は、1889年にパリの万国博覧会で初めて一般に公開されました。この楽器は「1889年パリ万博グランプリ」を受賞し、ヴィクトル・ミュステルにはレジオン・ドヌール勲章(シュヴァリエ)が授与されました。



天使の響き、 チェレスタの使い方

「天国のような」の意味の通り、天国や大自然の響き、星や水などを表現する、こぞという時に使われている。

フルートやハーブなどとセットで使われることが多い。